

ぼいす

北区飛鳥山博物館だより
2005.9

15

秋期企画展

「北区の板碑—石が語る歴史」

会期:2005年10月22日(土)~12月4日(日)

会場:特別展示室・ホワイエ

観覧無料



北区に現存する最古の板碑(1262)



板碑のある風景(小川町)



十仏種子板碑(部分)

鎌倉~戦国時代にかけて造立された板石の塔婆“板碑”。供養塔婆の一種である。板碑に刻まれた銘文は、中世という時代をこの地域で生きた人々の歴史や、彼らの現世・来世への切なる想いを雄弁に物語ります。さらに我々を魅了して止まない板碑のもつ造形美や、銘文を刻み込んだ謎多き石工たちの高度な製作技術から、彼らの暮らしの匂いを感じてみませんか。

秋の企画展

北区の板碑—石が語る歴史

◆“板碑”とはなんぞでしょう。

“板碑”はその名の通り、“一枚の板状に成形された石製の塔婆”です。薄く成形した青石の頭部は山形、その下に二本の刻み（二条線）を有します。中心部分には大きく主尊を刻み込み、その下に紀年名・願文などが彫られます。主尊とは、信仰の対象となる仏で、多くは阿彌陀如来や釈迦如来が刻まれます。願文とは造立した目的です。造立の目的は①亡くなった方の追善供養②生前に自らの死後の菩提を弔う仏事＝逆修供養の2つがあります。基本的に1基の板碑は1人の供養のために造立されますが、逆修などの場合には数人の名前が刻まれていることもあります。また、1400年代に入ると「月待」や「庚申待」などといった信仰を同じくする人々が集団で建てた板碑も多くなります。

◆“板碑”はなぜつくられたのでしょうか。

板碑は鎌倉時代から南北朝を経て室町時代に盛んに造立されました。前代の平安時代には宝篋印塔・五輪塔など石塔類は造立されましたが、板碑ほど多くありません。それはまさに、それまで貴族などの上流階級の人たちにも限られた天台・真言密教や、平安時代後期になって起こった浄土教などの教えが広く武士に浸透したためと考えられています。さらに仏教が庶民により一層広がりを果たしたことが大きく関係しているのです。

◆北区になぜ“板碑”が多く存在するのでしょうか。

板碑は一枚の石でできた塔婆です。なぜ、北区にも多く存在するのでしょうか。そもそも材料である青石はどこから運ばれてきたのでしょうか。関東、特に武蔵国を中心とした地域（現在の埼玉県や東京都）では、埼玉秩父地方で産出する緑泥片岩が使われます。この石材で造られた板碑を特に「武蔵型板碑」といい、代表的な板碑とされています。現在でも採石場と考えられている場所には多くの石片が堆積し、頭部を山型に成形したものも発見できます。北区域は、ここから石材を運ぶ荒川の水運が利用しやすい地域であったことや、豊島氏などの豪族が存在したことが、板碑が多く造られた原因のひとつとされています。実際に現在わかっている範囲では、台地や微高地での残存例が多く、当時の人々の生活域などを垣間見ることができるのです。石が語る歴史を歴史を確かめに、是非ご来館下さい。

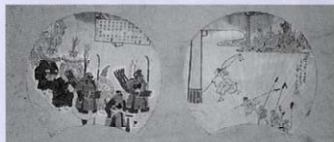
●企画展関連講演会 「石塔の造立とその背景—北区の板碑調査から」

- 講師：諸岡 勝氏（元北区中世石造物調査団主任調査員）
- 日時：11月13日（日）14時～15時30分 ■ 場所：講堂 ■ 定員：80名
- 申込方法：往復はがきで10月28日（金）必着



約5mある世界一大きな板碑（長瀬町）

新着資料紹介 王子田楽の団扇



表装された団扇の地紙



右側の地紙上部

今回は先頃ご寄贈いただいた王子田楽の団扇をご紹介します。この団扇は地紙をはがし表装された状態となっています。もと王子在住の寄贈者の方によれば、団扇は昭和15年（1940）頃に記されたもので、戦後になって表装されたそうです。

題材となった王子田楽は王子神社の祭礼に際して奉納される中世以来の伝統芸能として知られています。戦争の激化により昭和18年（1943）を最後に途絶えていましたが、昭和58年（1983）、地元有志の方々の尽力によって見事復元されました。かつては旧暦7月13日に行なわれましたが、現在では毎年8月の第1日曜日に行なわれています。

団扇を見ると、右側の地紙に「明治丁酉年八月十三日」と記されており、団扇の絵が明治30年（1897）8月の田楽を描いたものとわかります。この地紙の中央には舞に先立って行なわれる「七度半の使い」の様子が、また上部には田楽舞が行なわれている舞殿が描かれています。かつて王子田楽は「団扇祭り」とも呼ばれ、縁起物とされた花笠を見物人が激しく奪いあうことで知られていましたが、この絵でも舞殿の上には舞童などの田楽衆のほか、白丁姿の数人が棒を持って見物人を牽制する姿が描かれています。そして左側の地紙には、七腰八腰と呼ばれる四魔佛武者たちに先導された舞童の舞殿に向かう姿が繊細に描かれ、上部には田楽番付として十二番の内容が示されています。

団扇は消耗しやすいため失われることが多いものです。丁寧に表装された団扇からは王子田楽を大切に思う気持ちが伝わってくるようです。（K）

環境への関心・企画展ギャラリー・トークの開催

今春の企画展「江戸のリッチモンド・あこがれの王子・飛鳥山展」では、ギャラリー・トーク「かつてリッチモンドと呼ばれた町から未来に向けて…今、考える環境問題と景観」を関連イベントとして開催しました。会期中の3月19日(土)・20日(日)・21日(月)・4月16日(土)・17日(日)・30日(土)・5月1日(日)の各13時から13時45分にかけて、各回30名の定員で企画展担当学芸員のトークを行いましたところ、世代を異にする参加者多数の方々と交流を得ることができました。当企画展は、幕末に北区を訪れた外国人からロンドン近郊の景勝地になぞらえ「日本のリッチモンド」とまで賞賛された花と緑の名所を紹介するだけでなく、「環境・共生・感性」の回復という今日的課題を解決する糸口を江戸時代の地域像に求めるものでした。地域から世界に向かって発信された幕末の地域イメージのその後の変遷と、現代において測いのある都市環境を考える一助になればとの考えで構想したこの企画展では、展示意図をよりわかりやすく紹介するために、在日英国大使館のご協力を得て同大使館制作の中学校・総合学習に対応したワーク・シート「君が変える地球の未来」のご提供を受け、配布資料とさせていただきます。ギャラリー・トークでは現代のイギリス・リッチモンドを紹介する映像を見た上で景観を守る工夫について考え、その上でワーク・シートを使い展示を見ながらトークを行いました。ワーク・シートから「木と私たち」「自然界のエイリアン?」「メダカはどこへ行った?」「もう「わりばし」は使わない?」「みんなで使う森林」「サクラの開花が早くなる?」「メスの貝がオスになる?」を使い、適宜「地球となかよく」「市民の組織NGO」を参照しました。19世紀中頃の王子の温湿度を現代と比較したり、緑の多い環境が景観美形成にどのように反映したのかをお話することを通して、参加者からは身近な自然のもつ役割について意見交換も見られ活発なギャラリー・トークとなりました。(孝)



企画展会場入口



ギャラリートークのようす

あるく、みる、まぐ

未知との遭遇・UFOとお地藏様



都電荒川線「堀原」を下車してすぐ、どこか懐かしい昭和の空気がただよぶ場所・堀原銀座商店街の中ほどに、な、何とUFOが! 超レトロな「宇宙円盤」が化粧品店につっこんでいるではありませんか。しかし驚いたのは筆者だけで、道行くお買い物客のみなさんのご関心ははるかに宇宙の彼方ではなく、となりの小さなお堂の中にあつた。毎月、3のつく日がお縁日というこちらのお地藏様、その名も「愛宕地藏」は、所もなんと3にお縁の堀船3丁目33番3号にあります。木造の由緒あるお堂をのそくと高さ97センチの、とても立派な舟形光背を持つお地藏様が、防火・眼病に豊饒あるほか商売繁盛、子育てにご利益があると伝えられていまして、いつもろうそくの灯や線香の煙は絶えることがありません。「愛宕地藏」はその昔、付近の旧家・小泉家が堀原堀之内村の領主であった旗本・水野家から勧請したという云われを持つといえます。当地にお地藏様がいらしたの江戸時代のことになります。そもそも愛宕といえは江戸では芝の愛宕山が有名ですがその源は京都の愛宕権現に由来します。勝軍地藏・泰澄大師・不動明王・毘沙門天をまとめて総称したのがこの愛宕権現、防火の神様として旧来の「境の神・サ工(障)の神」と結びつき、地域を外敵から守護する働きを担ったのがはじまりといえます。そういえばUFOの襲来もお地藏様のおチカラで防御されたとも見えるのは、妙といえ妙な話です。(孝)

クローズアップ

赤羽

昔に会いに行きませんか？赤羽へ

線路の高架にもなつて、すっかり様変わりした赤羽駅とその周辺。でも、ちょっと歩を進めれば、まだまだ懐かしい風景に出会えます。かつて日光御成道と呼ばれていた岩槻街道。往時を偲ばせる庚申塔や道標。不思議な門構えのお寺も。そうそう、赤羽は坂道が多いことも特徴です。坂の上からみる景色はそこだけちょっと時間が止まったような錯覚も。変わりゆく赤羽。記憶のスケッチにぜひあなたも。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



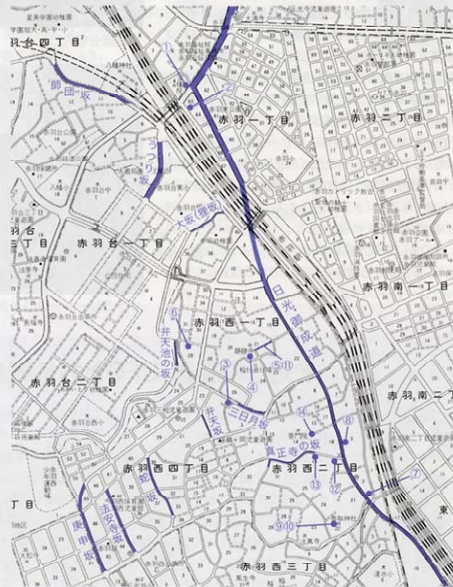
⑧



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭

①宝徳院前の道標 ②懐かしい路地 ③道灌堀は今でも営業中 ④中に道灌の座像が(静勝寺) ⑤ほくも待っています(静勝寺) ⑥大亀ならぬ小亀がいっぱい(井天池) ⑦古い酒屋さん ⑧元は郵便局でした ⑨迫力満点!(香取神社) ⑩力石がころころ(香取神社) ⑪石段の上には静勝寺 ⑫脇道に行くと庚申塔 ⑬古い表札発見! ⑭なにやら不思議な……。 (普門院)

日光御成道のススメ

現在の岩槻街道は江戸時代には「日光御成道」といわれていました。この御成道は歴代の将軍が徳川家康の年忌のための祭儀を行い、日光東照宮に参詣するために整備された道です。赤羽駅より南の部分歩いてみると、さすがに江戸時代の家屋は残っていませんが、古い雰囲気のある家がちらほら見られます。また、脇道には庚申塔があったり。現在、岩槻街道は拡幅するために街道筋の家が取り壊されつつあります。便利さと引き替えに昔の風情が消えていくのはちょっと寂しい気がしますね。さあ、昔の気分に浸るのも今のうち。



坂の上から

急な坂道を登り切り一息ついて振り返ると、そこには青い空に銭湯の煙突、その向こうに赤羽台団地。なんとなく懐かしい雰囲気風景がそこにはありました。この坂道は三日月坂。静勝寺の南にあります。銭湯の名は道灌湯。戦前からある古いお風呂屋さんです。この三日月坂も戦前、陸軍造兵廠火工廠へ続く道として造られました。このように赤羽には歴史を感じたり、思いがけない景色に出会えたりする坂がたくさんあります。みなさんもお気に入りの坂を見つけないかと散歩してみてください。

(片)



振り返るとそこには…

むかしむかし亀ヶ池に…

弁天通りから脇に入った所にある弁天池は昔の亀ヶ池のなごりです。亀ヶ池には、いくつかの古い言い伝えがあります。まず、池の名にもある「亀」。ここには昔から大小無数の亀が棲んでいて、その中には子ども前にか現れないという大亀も潜んでいるとか！？さらに池の主まつわる伝説も…。昔、池のほとりて美人の頼みを聞いた男が、お礼に買った、「開けず持っている」と一生暮らしたに困らない「紙包みを開けてしまうと、中には蛇の鱗が！」そうです。美人の正体は池の主の大蛇だったのです。今は小さくなってしまった亀ヶ池。大蛇はいませんが、今でも亀はたくさんいます。

(T)



亀ヶ池のなごりの弁天池

伝説を推理する!?

赤羽には昔からの言い伝えがいくつかあります。亀ヶ池の話もそうですが、坂まつわるこんな話も。いつ頃からかは知らないが、大坂に大きな横穴がありそこに狸が棲みついてた。なので、坂は狸坂ともいう。その狸は坂を往来する人馬をおどしては馬を取り上げ、穴に引き込んでしまう。後日おそるおそる穴をのぞくと馬の骨が山と捨てられている。困り果てた村人は、強者で名高い石井政右衛門に頼んで、狸を懲らしめてもらい、それ以降、狸は悪さをしなくなったとか。さて、この狸坂は現在の赤羽西1丁目39番にある赤羽台団地上る坂ですが、この話で気になるのが「大きな横穴」です。赤羽台の崖には奈良時代のお墓である横穴墓が発見されています。中には多くの人骨が残っていることも。もしかしたら、偶然開いた横穴墓をのぞいて見たその様子の驚きから、この伝説が生まれたのかもかもしれません。

(画)



ぽっかり開いた横穴(赤羽台横穴墓群)

●太田道灌ここにあり! ●

静勝寺はあの太田道灌が築いた稲付城の跡に建てられたお寺です。境内には小さなお堂があり、中に道灌の座像があります。お堂は普段は閉まっていますが、毎月26日には開扉するので、道灌に会える月に一度のチャンスです。(博物館に來ればいつでも道灌に会えます。ただし複製品です。)

(T)

昭和の映画館

写真に見るあの昭和の時代

当館では、北区在住の手川文夫氏によって撮影された古い写真を、複写して提供していただいているが、その中に昔北区にあった映画館の写りが数枚含まれている。

明治時代に日本ではじめて映画が輸入されてから、昭和30年代のテレビの普及に至るまで、映画は日本人の娯楽の中心を担い続けた。そして、今のテレビゲーム世代(私もそうだが)にはちょっと意外に思うくらい、現在よりもはるかに多くの映画館が街に存在したのである。

昭和26年に編さんされた「北区史」によると、たとえば赤羽周辺に4館、王子に3館などとなっているが、昭和30年代にはもっと多かった。手川氏の写真はそれらの外観を今に伝える貴重なものだ。

それらを見ていくと、館外にはたたく織や絵入りのタイトル看板から、当時に上映されていた映画が判明して面白い。右写真の「赤羽公衆劇場」では「死の谷」、「大城塞」などの西部劇のタイトルが見える。また「王子銀座座」の玄関先に下げられた提灯には、あの「七人の侍」の文字が! こんな話をする、「黒澤映画」や「溝口映画」、または石原裕次郎らが活躍した日活の「タアキ」企画など、なつかしく思われる方は多いのでは?!

(F)



「赤羽公衆劇場」 昭和127年1月5日撮影

飛鳥山発「自然ナシヨナリスト宣言!」

大地・水・人

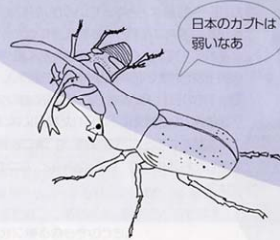
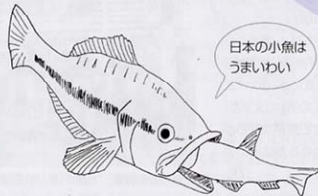
中野守久

たまたま世の中が夏休みだからというわけでもないのだが、魚と昆虫の話をもつたと思う。

1つ目は今年の2月に小池百合子環境相が特定外来生物の指定リストにブラックバスを裁量で加えたことについて毎日新聞に載った構成討論記事から。肯定側は中井克樹氏(滋賀県立琵琶湖博物館主任学芸員)と秋月岩魚氏(写真家)で、否定側は水口憲哉氏(東京海洋大学教授)である。中井氏と水口氏は環境省専門家会合の委員でもある。肯定側の主張は、これまでの結果からこの魚が引き起こす外来種への影響は明らかなのだから、自然保護思想の観点からも駆除や受益者による生息域の管理徹底は必要だというもの。これに対して否定側の主張は、外来種減少や内水面漁業衰退の原因にブラックバスを楨玉にあげるばかりで、それ以外の可能性を十分に精査しておらず、この決定はいわば「魔女狩り」だとしている。ブラックバス問題は今に始まったことではなくこうした議論は昔からあったが、特定外来生物被害防止法施行にともない再び熱を帯びてきたようだ。ブラックバスは北米から移入された魚で40年前には生息が稀であったが、主に釣り人によって湖・池沼・河川などへ放流が繰り返され、現在北は北海道から南は九州沖縄まで日本列島あまねく分布してしまっただけでなく、国内の様々な水域で在来種の小魚が餌食となり、漁業にも深刻な影響をもたらしている。

2つ目は息子の昆虫採集用具をもとめて中央浴場の某昆虫ショップに出かけた際の話である。そこで見たものはすさまじいばかりの現実であった。店内に入ると国内産の甲虫類のほかにはラクスオオカブトやダイオウオオヒラタクワガタなど大量の外国産の大型甲虫類が所狭しと棚に並べられている。1個体数千円から数万円と金銭的にはかなり高価だが、飛ぶように売れており子供だけではなく大人も大勢訪れている。実はこうした光景が始まったのは1999年(平成11)11月植物防疫法の一部が改正になり外国産の甲虫類が生きたまま輸入できるようになったからだろう。外国産の甲虫といえども他のペットと同様に死ぬまで飼育すれば問題は少ないのだが、一部の人間が生体のまま外に放したり(放虫という)飼育後の後始末をしないために深刻な事態が生じてきた。ひそかに外国産の甲虫類の繁殖や在来種との交雑が進行しているらしい。特に気候学的にも日本の夏は熱帯並みとなるので、外国産の甲虫類は日本の環境に適応しやすい。在来種に比べて大型のクワガタは同種の小型の在来種と交尾も可能だ。とどのつまりは、生態系を遺伝子レベルで乱してしまうということ。現在国内でその影響と考えられる個体がすでに確認されているのだ。これは穏やかではない。

勘のいい読者ならすでにお気づきであろうが、この2つの話題には共通性がある。「放流」と「放虫」という人間の無責任かつ不要な介入によって本来の自然生態の秩序が損なわれているということだ。今日、生物学的にもあまりにも無知すぎる人間が多くなってきた。例えば、甲虫をついで飼育すれば、当然交尾し卵が産み付けられるくらいは想像すべきであるし、飼育後の土壌の処理についても細心の注意を払うべきだ。今こそ自然史関係の博物館はこうした生物資料のハンドリングを一般にしっかり普及する必要があると思う。さて、荒川にも北区の調査で多くのブルーギルやブラックバスが生息していることが分かっている。学術的には増殖動物というが、ハクレン(戦前に中国から移入)やカムルチー(大正期に朝鮮から移入)なども多く生息しており、今や荒川の魚類の代表格といった感さえある。古くから日本の風土に根づいて生息してきた在来種の魚に比べると繁殖力は旺盛である。もし将来在来生物の多様性が損なわれれば、固有の自然の意義はうすれ学術的な価値は低下しよう。今ほど自然環境に対しての正しい認識とモラルが各人にもとめられている時代はない。



ぼいす

考古資料の保存と活用

博物館に収蔵されている資料の中でも、発掘によって地中から掘り出された埋蔵文化財、いわゆる「考古資料」は、はじめから壊れて出土したり、土中から取り出すことで引き起こされる環境変化による劣化などがあるため、保存や展示に至るまで様々な処置が必要となります。

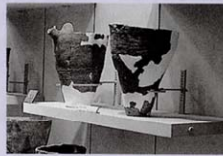
土器などを含む土製品のように環境変化に強い資料については、発掘資料の整理担当者や、博物館の学芸員が自分の手で復元したり、修復したりします。例えば土器の修復作業では市販の接着剤で接合できますし、補強材としては石膏が一般的に使用されています。近年は、樹脂を使用した、より使い勝手が良く、資料にやさしい補強材も開発され、使用される機会が増えてきました。

しかし、考古資料の中には、応急処置は

できても根本的な保存・修復のための処理は学芸員の手には負えないものが多くあります。例えば鉄製品は遺跡から出土した際にはサビで覆われていますが、X線写真を見ながらルーターやエアブラシによってクリーニングしたのちに、脱塩処理、合成樹脂含浸などの処理を行います。現在、遺跡から発掘される鉄製品、あるいは木製品・漆製品などの有機質遺物は、このように高度に専門的な技術をもった施設・業者に委託され、修復・保存処理されるのが通例になっています。

もうひとつ、それらの文化財を博物館資料として扱った場合、「活用」という問題があります。博物館における「資料の活用」とはお客様に見たり触ったりしてもらうことに他なりません、そのことが時折、「資料の保存」というもう一つの学芸員の

義務とぶつかることがあります。ここが学芸員の悩みどころですが、非常に壊れやすい資料については精巧なレプリカを作成して展示したり、また、講座など学芸員が資料の近くにいることができる場合には、触り方をレクチャーした上で実物資料に触れてもらったり、などと、「保存」と「活用」を両立する工夫をしています。(F)



学芸員によって復元された土器 (当館常設展示)

博物館インフォメーション

● 懐かしさがいっぱい!

「来て、見て、さわって!昔の道具」

平成18年1月7日(土)～2月28日(火)

毎冬おこなっている「来て、見て、さわって!昔の道具」は小学校3・4年生の社会科学学習に対応する展示見学と体験学習のプログラムですが、期間中、学校の団体利用がない日は展示室を一般公開します。冬のひととき、親子やご夫婦、またお孫さんと一緒に、昔の道具に囲まれて懐かしさあふれる時間を過ごされてはいかがですか?

<一般公開日>

1月7日(土)～1月15日(日)および毎週土曜日・日曜日※1月10日を除く



資料にさわったり、動かすこともできます!

● 常設展示ニュース

常設展示の水塚の復元家屋では、年に数回、年中行事の飾りつけを行なっています。

12～1月は「年越し」、2月中旬～3月は「雛祭り」、4月中旬～5月は「端午の節供」、6月中旬～7月は「七夕」、9月下旬～10月は「月見」と、所蔵資料を活かしながら、かつて北区で行なわれていた年中行事の飾りつけを再現しています。水塚の家屋は常設展示室の奥にありますが、ご観覧の際はのぞいてみてください。

● 当館オリジナル・季節限定バッジが出揃います!

昨秋の「ぼいす」でもご紹介した季節限定バッジですが、11月に新登場する「紅葉」で各季節のバージョンが出揃います! 春の「さくら」、初夏の「あじさい」、夏の「花火」、秋の「紅葉」、冬の「雪の結晶」と、各デザインともスタッフ



冬バージョン「雪の結晶」

が心をこめて作りしました。どれも季節限定販売ですので、ご来館の際にチェックしてみてください。全バージョン集めた方は、正真正銘の飛鳥山博物館ファンかも(?)。

● 人物往来

本年3月31日をもちまして、館長であった高木博通が北区区民部国保年金課長として異動し、後任として遠藤時雄が新たに館長を務めることとなりました。今後ともよろしくお願いたします。

● 北区の昔を伝えるモノや写真を探しています!

博物館では区内で使われていた生活用品や北区に関係する古い文書、また昔の街並みや人々の暮らしぶりがうかがえるような写真などを探しています。昔の様子を知る手がかりがどんどんと失われている時代だからこそ、処分する前にどうか一言お声をください! ご一報は03-3916-1133、担当クボノまで。

土
器に
触れ
たい
は
遙か
六千
年

学芸員リレーエッセイ 博物館いるは歌留多

博物館には春先に総合的な学習の一貫で、小学校の高学年の子ども達が縄文時代や弥生時代といった古代の勉強をしにやってきます。子ども達にしてあげる話の中に必ず取り入れていることは、普段触ることの出来ない土器に触らせてあげることです。「せっかく来てくれたから、みんな、今日は特別だよ!」とあって展示してある縄文土器をひよいともち、子ども達の中に、「いいかい、手のひらで触れてごらん。どんな感じかな?」それまで話にあまり興味をもっていなかった子ども達の目が輝き、くいのように土器を見ながら手のひらでその感触を味わっている。「わ〜っ」とか「お〜!」といった歓声も。先生も「私もいいですか?」といて手を伸ばす。このあとの子ども達の話の聞く姿勢のいいこと!「みんな六千年前の感触はどうだった?」「ざらざらしてる」「あったかい感じ」ふんぶん、これでつかみはOK!「さあ!縄文人はこの土器をどんなふうに使ったんだろうね?想像してみてください」

学芸員は手を変え品を変え、子どもたちの興味を引き出せるようにいろいろと工夫します。目や耳だけでなく手でも学習。感じとることって大切だと思いませんか?ただ今北区飛鳥山博物館では、土器接触経験小学生急増中! (直)

平成17年度下半期の主な催し物

秋 10月~11月

- 特別展覧会「第4回人間国宝・奥山峰石と北区の工芸作家展」(9月10日~10月10日)
- 秋期企画展「北区の板碑—石が語る歴史」(10月22日~12月4日)
- 見学会「親子でまちめぐり」(10月2日)
- 講座「第2回上級考古学講座」(9月24日・10月1日・8日・15日)
- 講座「第9回遺跡探訪」(10月22日・23日)
- 観察会「荒川の生物を考える」(10月29日・30日・11月3日)
- 講座「熊野学講座」(11月20日)

冬 12月~3月

- 見学会「在来種野菜の畑作を見よう」(12月2日)
- 講座「中世講座・鎌倉探訪」(12月10日・11日)
- 見学会「はじめての北区めぐり」(12月23日・1月9日・15日・22日)
- 学校対応展示&体験学習「来て、見て、さわって!昔の道具」(1月7日~2月28日)
- 講座「第10回新聞から読む考古学」(1月21日)
- 講座「第6回初級考古学講座」(3月4日・11日・18日・25日)
- 春期企画展「(仮称)鳥の目から見た地表の造形—豊高隆三写真展」(3月15日~5月7日)

*催し物名は仮称です。
詳しくは総発行の「催し物案内」をごらんください。

利用のご案内

【開館時間】
午前10時~午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)

【休館日】
毎週月曜日(国民の休日・振替休日の場合は開館)
年末年始(12月28日~1月4日)
国民の休日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)
このほか臨時休館日があります。



【常設展覧料】

	個人	団体	三館共通券
一般	300円	240円	720円
小中高	100円	80円	240円

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をご覧になれます。

お知らせ

- 文化の日は観覧無料!
11月3日(木・祝)文化の日は、常設展示室を無料でご覧いただけます。これを機にぜひ展示をご観覧ください。お待ちしております。
- 年末年始の休館日
平成17年12月26日(月)~平成18年1月4日(水)
※今年12月26日が月曜日、27日が祝日(24日)の振替となるため、例年より年末の休館日が早まります。何卒ご理解くださいますようお願いいたします。

編集後記

今年前半は地震や大雨などが続いて、なにやら平穏とはいえない半年でしたね。博物館の世界も景気のいい話はほとんど無いのですが、当館スタッフはとにかく前を見て一歩一歩進んでいこう、という気持ちで日々の講座や展示などに向かっています。今回の「ほいす」15号では、そんな当館の前のめり(?)の姿勢を感じていただけたでしょうか?今年の後半も盛りだくさんの事業をご用意していますので、ご期待ください。(K)

北区飛鳥山博物館だより
ほいす 15
発行 平成17年9月20日
編集 北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL 03-3916-1133
発行 東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL 03-3908-1111 (代)
印刷 文明堂印刷株式会社
刊行物登録番号 17-2-018